

地域に生きる多様な他者とともに課題を解決する対話型授業の実践
—中学校第1学年における国語単元学習の一考察—

安 暁彦

【要 約】 中学校学習指導要領改訂の要点（①主体的・対話的で深い学び，②カリキュラム・マネジメントの充実，③生徒の発達の支援，家庭や地域との連携・協働）を踏まえた単元開発の一提案である。学習者は学習課題を解決するために，地域に生きる多様な他者と，それぞれの立場の強みを生かして交流し，課題解決の糸口を自ら見いだす対話的な単元を構想することを通して，学習者は問いを立てる資質・能力を育成し，考えを形成することができた。

【キーワード】

地域との連携・協働 「問い」を立て最適解を得る資質・能力 多様な他者との交流
アクティブラーナー型活動者 オーセンティックな資料 考えや意味の形成

1 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編（以下「解説」という）には，改訂の要点として①資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」，②カリキュラム・マネジメントの充実，③生徒の発達の支援，家庭や地域との連携・協働，の3点が示されている。

またカリキュラム・マネジメントについて「生徒や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下『カリキュラム・マネジメント』という。）」と示されている。

この要点の意味を鑑みたとき，③の土台をもとに，②を整備し，①を実現するという構造を本研究では捉えた。これらの要点を具体化し，①を達成するためのキーワードとは一体何か。それは，学習者同士の学びによってのみではなく，学習者が「多様な他者」と，様々な課題をともに解決し，最適解を得ていくような，「社会に生きる多様な他者との交流」なのではないか。それらの場を設定し，目的意識や課題解決意識を醸成しつつ，学習者が育成すべき資質・能力を育てることが，教科における教育活動の質の向上であると考えた。本校の研究主題は，「社会を創る自立した生徒の育成（2年次）」である。筆者は「解説」に示される改訂の要点と研究主題との関連性を踏まえ，社会との切れ目・境目を排除し，社会に生きる様々な立場の人々との対話を通して相互に関わり合うカリキュラムの構築が，本校の研究主題に寄与する可能性を捉えた。加藤他（2018）は「2008年改訂の学習指導要領以降は，どの学校も似たような教育を行う『横並びの教育課程』ではなく，各学校が子どもや地域の実態を踏まえた特色ある教育課程の編成を行うことが求められている」ことを指摘している。

本校には，平成11年度に設立された「附中スクールボランティア」制度がある。ボランティア活動者は本校在校生の保護者，または卒業生の保護者を中心に組織されている。また本校OB・OGにも登録者がいる。これらの人々との対話を通じて，学習者の資質・能力を育む学びを構想したいと考えた。佐藤（2002）は，学校支援ボランティアを①GTティーチャー型，②学習アシスタント型，③施設メンテナー型，④環境サポーター型の4つのタイプに分類し，その特徴を整理した。ここでは，ボランティア活動者を，佐藤の分類に付加し，⑤「アクティブラーナー型」活動者として設定する。「アクティブラーナー型」活動者とは，「支援者の立場でありながらも，学習者としての視点をもってともに学びを進める協働者」と本研究において定義する。

3 研究のねらい

中学校第1学年国語科の学習において，身近な学習材や地域に関連する学習材を話題として取り上げるとともに，そこから考えるべき課題を設定し，その解決に向けて多様な他者との交流場面を適切に位置付ける手立てを設定することが，学習者の「問いと立てる力」を育成し，自分の考えや意味を形成する国語単元学習の一提案となることを明らかにする。

2 研究の仮説

中学校第1学年国語科の学習において、身近な学習材や地域に関連する学習材を話題として取り上げるとともに、そこから考えるべき課題を設定し、その解決に向けて多様な他者との交流場面を適切に位置付ければ、学習者は自ら「問い」を立て、「問い」を吟味し、課題解決に向けて行う多様な他者との交流を通して、最適解を発見し、自分の考えや意味を形成することができるであろう。

3 研究の内容

基本的な考え方

①「身近学習材や地域に関連する学習材」とは

本校国語科では、学習者が生活する地域に現存し、かつ教科書等に掲載するために修正が加えられていない様々な言語資料を、令和元年度から「オーセンティックな学びを可能とする資料」として定義し、提示資料として活用している。本研究では、本校の校歌の「歌詞」を「オーセンティックな学びを可能とする資料」として取り上げ、歌詞の言葉に着目する方法を提示する。歌詞の言葉に着目させる手立てとして、「梅」にまつわる資料を準備し、資料と関係付けて考察させる。この手立てにより「言葉による見方・考え方」を働かせる授業を展開する。

②「多様な他者との交流」とは

本研究では、課題の解決に寄与する人材を四つの視点で選出した。ア. 言葉に関する専門家としての大学教員、イ. 歌詞に表出する「水戸の初花」に関連する専門家としての水戸弘道館研究員、ウ. 学習者と校歌を通して関わりをもつOB、OG、エ. 学習者と地域的関わりをもつボランティア活動者である。ア～エを本研究における「多様な他者」とする。これらのゲストティーチャー（以下GTという）に学習者がインタビューを行う。インタビューを効果的に行うために、これまでの単元の中で習得した「傾聴」「肯定的な質問」「賞賛」など、相手から情報を引き出すための知識・技能を生かすよう助言する。多様な他者との交流で得た情報と、「オーセンティックな学びを可能とする資料」から得た情報を関係付け、「言葉による見方・考え方」を働かせ、考えや意味の形成としての最適解を追究できるようにする。

③「考えや意味の形成」とは

「考えや意味の形成」を図1のように整理した。学習者は課題に対する「問い」を立て、問いを分類・整理して精選する段階でまず自己の考えや意味を形成する。

その上で、前項②に示した「多様な他者との交流」を通して、自己を再構築し、新たな語彙を得て、再構成していく。再構成した考えは、さらに「問い」を生み出し、新たな意味や考えの形成を促す。以上のサイクルを通して、自己の考えや意味を刷新しつつ深めていく思考過程を、「考えや意味の形成」と捉えることにした。

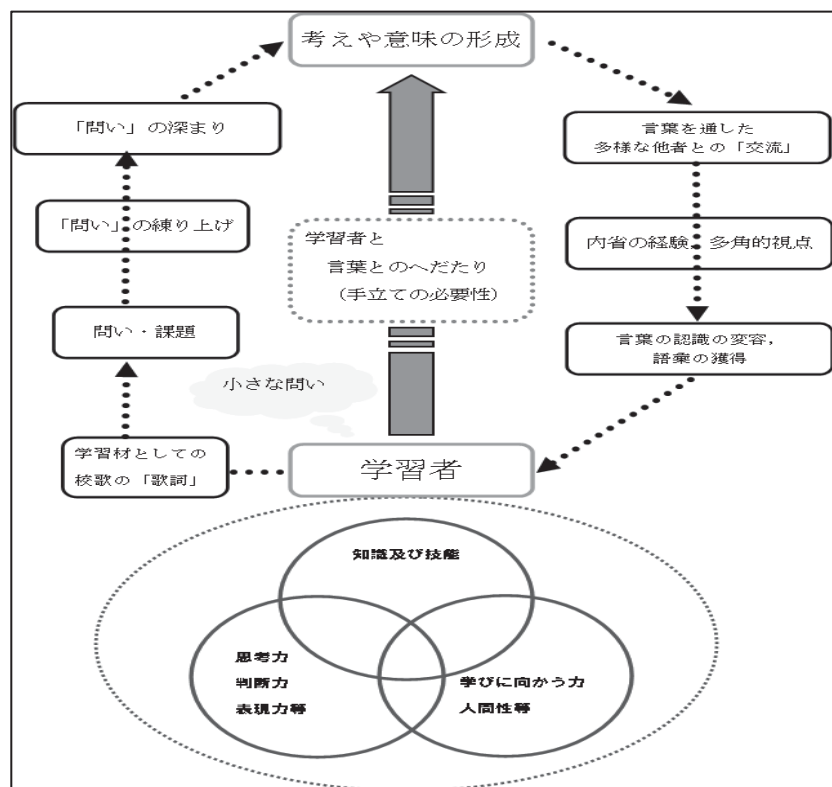


図1 「考えや意味の形成」モデル

4 研究の実践

(1) 単元名

「ことばを見つめ、今改めて問う ～われらこそ水戸の初花～」

(2) 単元設定の理由

本単元のねらいは、学習者が「言葉による見方・考え方」を働かせ、「問い」を立てる資質・能力を育成することである。本単元を実施する6月は、第1学年の学習者は校歌の歌詞を覚え、歌唱できるようになる時期である。音やリズムを通して身体に浸透しつつある歌詞について、「言葉による見方・考え方」を働かせ、改めてそこに示された言葉について「問い」を立てる。その最適解を得るために、多様な他者との対話の機会をもつ。このような言語活動を設定することは、音楽と国語の単元学習と捉えるとともに、学習者にとって地域に生きる自己のアイデンティティを確立する一歩であると考えた。本単元は、学習者が学習者同士の対話的学習にとどまらず、「多様な他者との交流」を通して、自分の考えの形成に生かすとともに、校歌の歌詞を、「言葉による見方・考え方」を働かせ、歌としてのみではなく、言葉として校歌に内包的意味を見いだせるようにしたいと考え、本単元を設定した。

安居(2013)は「生き生きと魅力的な単元にするためのポイント」として五つの視点を整理した。その中で「我が国の伝統や文化・歴史に対する理解を深め、『日本人』としてのアイデンティティ、豊かな情緒、感性などをはぐくむことを意識する場があるか」と授業者へ問いを提起する。この問いへの本研究における手立てとして、「オーセンティックな学びを可能とする資料」との出会いの場、「地域の多様な他者」との交流の場の二つの場を設定した。

(3) 学習者の実態

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらかといえばそう思わない ④そう思わない

質問項目 (一部抜粋)	①	②	③	④
1. 新しい単元に入ったとき、興味をもって取り組んでいますか。	56%	44%	0%	0%
3. 学習材に出会ったとき、自分の言葉の力と比較しながら課題意識をもって取り組んでいますか。	42%	44%	14%	0%
9. 話し合いや比べ合いを通して、的確な読みや適切な表現はどのようなものか理解しようとしていますか。	56%	36%	6%	2%
11. 単元の終わりには、自分の言葉の力が伸びたと実感することができていますか。	50%	31%	17%	2%

表1 国語学習アンケート(1年1組生徒 男子18名 女子18名 計36名 令和元年5月実施)

表1のアンケートは、本校国語科で毎年行っている学習者向けのアンケート(12項目)から4項目を抜粋したものである。学習者は、単元への興味・関心について高い意識をもっていることが分かる。一方課題として、言葉への課題意識をもつことが難しく、的確な読みや言葉の力にやや不安を抱える学習者が見られることが、項目9の③④の回答から伺える。

これらの不安を解消する手立てとして、言葉と向き合う学習内容の設定、個人の学びを支える学習班活動、以上2つの手立てを付与する必要性を捉えた。よって、本単元においては「問いを立てる」資質・能力を育むための学習活動を学習班での協働において設定することとする。

(4) 指導観

本単元のねらいは学習者が「言葉による見方・考え方」を働かせ、「問い」を立てる資質・能力を育成することである。そこで、本校の校歌に示された歌詞の意味を解釈する言語活動を設定する。

具体的な活動として、校歌の歌詞を提示し、そこに示された言葉についての「問い」を考え、分類・整理し、精選する。さらに、著名な資料や地域に現存する資料の情報と、多様な他者との対話から得る情報とを関係付ける。これらの活動を通して歌詞に示された言葉の意味を解釈しその期待

に応える人材として、未来に向けてどのように成長していきたいのか、改めて考えや意見を表明したり共有したりする。

これらの活動を通して、社会に参画・貢献する主体的な学習者としての態度を涵養したい。

本校の校歌は、「香りゆかしく咲く白梅は 春のさきがけ若き力よ」と始まる。梅はそもそも、中国から渡ったものであり、日本人の梅に対する感情は、時代によってその捉え方に変容が見られる。しかしながら、この花を愛する感覚は、日本人にとって不易なものであるといえる。本県では、徳川斉昭公によって、弘道館、偕楽園に梅が植樹された。なぜ「梅」が植樹されたのか。その理由が弘道館に現存する碑文である「種梅記」に示されている。

さらに「われらこそ 水戸の初花」と示される歌詞において、なぜ「水戸の初花」なのか、歌詞の言葉を読み取るためにどのような「問い」を立てる必要があるのか、学習者が「言葉による見方・考え方」を働かせ、「問いを立てる」という資質・能力を育む。具体的に、①「問い」を喚起する学習課題の提示、②「問い」を精選するための分類・整理、③「問い」の最適解を追究するための多様な他者との対話、以上の三点を手立てとする。

本単元で学習者が「言葉による見方・考え方」を働かせ、自ら立てる「問い」を精選するために分類・整理する力を学習同士の対話の中で身に付けるとともに、「問い」に対する最適解に迫るために、多様な他者と対話する場において、対話の中で得た言葉を的確に読み取ったり、適切に表現したりすることへの不安を払拭する契機となるようにしたい。

(5) 単元の目標

- 「問い」の最適解を考える上で必要な情報を比較・分類したり、関係付けたりするなど、情報の整理の仕方について理解し、それらを使うことができる。 (知識・技能)
- 「問い」を精選し、多様な立場の人との対話を通して必要な情報を集め、自分の考えと比較しながら「問い」に対する考えを形成することができる。 (思考・判断・表現)
- 言葉を比較したり、言葉と言葉を関係付けたりしながら、校歌の歌詞に込められた思いについて学びを深めた自己の考えの変容を捉えることができる。 (学びに向かう力、人間性等)

(6) 指導と評価計画 (7時間扱い)

時間	学習内容・活動	評価計画				
		知・技	思・判・表	主・体・的	◎評価規準【評価方法】 ○ 指導上の留意点	◎規準を満たすための手立て
第1次	○単元を貫く学習課題 校歌の歌詞に込められた思いとは何か。 ・「梅」にまつわる身近なものから推察し、「梅」から想起される言葉を出し合う。 ・本校の校歌の歌詞について考察し、「梅」に関連する一文を探し出す。 ・大きな問い「香りゆかしく咲く白梅は春のさきがけ若き力よ」という冒頭部の言葉について、「言葉による見方・考え方」を共有する。 A⑬「エピソード」/A-1「知覚的喚起」				○ 古語辞典や和歌等、「香り」や「ゆかし」「さきがけ」などの言葉について考察するための資料を提示する。 ◎ 単元の見直しをもち、歌詞に示された言葉の見方・考え方を働かせようとしている。 【観察・ワークシート】	◎ 梅の菓子、梅干し、梅の線香など、梅に関連する具体物を示し、言葉で共起することができるようにする。
	・歌詞について、示された言葉に着目し、多面的な視点から問いを立てる。 ・立てた問いを全体で出し合い、GTへの質問を視野に入れ、問いを分類・整理し、精選する。 A⑭「データ」B⑤「発話内容の核心」/R-1「目的指向性」				◎ 立てた問いについて分類・整理する意味を理解し、問いを精選することができる。 【観察・付箋紙】	◎ 地域に現存する様々な資料を準備するとともに、問いを立てるために必要な手引きを提示することで手順を理解できるようにする。

4	<p>・精選した問いを解決するために、GT への質問を出し合い、分類・整理する。GT の立場から得られる情報を推察し、出し合った問いを精選する。それぞれの立場の人から必要な情報を得るための計画を立てる。</p> <p style="text-align: center;">B⑨「目的の設定」／C-1「学習要求」</p>	○	○	<p>○ 問いを立てる際の手順を確認し、前時の学習を生かして考えることを助言する。</p> <p>◎ B6 の大きさの用紙を準備し、問いを可視しやすいようにすることを通して、分類・整理しやすくするよう配慮する。</p> <p>◎ 立てた問いに迫る上で必要な情報を得たインタビュー用の手引きめの問い（質問）を精選することができるようにする。</p> <p>【ワークシート】</p>
第2次	<p>1. 本時の課題を確認する。(全体)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">立てた「問い」の最適解を得るために必要なことは何か</div> <p>2 GTを紹介する。(専門家、本校OB・OG、スクールボランティア) GTそれぞれのブースでインタビューを行うことを確認する。</p> <p>3 各ブースでインタビューを行う。(各3班)</p> <p>・各ブース10分の交流後、次のブースへ移動する。</p> <p style="text-align: center;">【インタビューの視点】</p> <p>(専門家ブース)</p> <p>○「種梅記」に示された言葉と「香りゆかしく咲く白梅」「水戸の初花」「向学の気風」などの言葉がどのように関係付けられるかを問う視点 (OB・OGブース)</p> <p>○「われらこそ」「水戸の初花」「向学の気風を継ぎて」「この庭に集う喜び」などの言葉が生活体験とどのように関係付けられるかを問う視点 (保護者ブース)</p> <p>○「われらこそ」「向学の気風を継ぎて」「清き学び舎」などの言葉がどのような中学生への期待を示す言葉か保護者の立場に対して問う視点</p> <p>4 インタビューを通して、本時の課題に対する考えを全体で共有する。</p> <p>5 GTからの感想を聞く。</p> <p style="text-align: center;">A⑩「ダイアログ」、B⑧「発話内容の再構成」／C-2「成功の機会」</p>	○	○	<p>○ 立てた問いの最適解を追究するために必要な情報を、歌詞に示された言葉や歌詞と関連する多様な立場の人からお話を伺う機会であることを確認する。</p> <p>○ 多様な立場をもつ他者として、実社会に生きる方々との対話場面であり、言葉を吟味して発話する必要があることを確認する。</p> <p>◎ 学習の手引き等を活用し、インタビューにおける技能を十分に活用できるようにする。</p> <p style="text-align: center;">【知識・技能一覧表参照】</p> <p>姿勢、アイコンタクト、発話内容、傾聴三動作、自己顕示欲の抑制、速記、信頼性の確保、肯定的な質問など</p> <p>◎ 発話内容を可視化できるよう板書に整理する。</p> <p>◎ 多様な立場の人との対話、全体での共有を通して、問いの最適解を得るためにどのような知識や技能が必要であったかを整理することができる。</p> <p style="text-align: right;">【発話内容・ワークシート】</p>
第3次	<p>・立てた問いの最適解を追究する。</p> <p>・問いを解決するために、GT から得た情報を考察する。その上で自分たちが捉える「問いへの最適解」をまとめる。</p> <p>・各班でまとめた最適解を共有する。(中間報告会)</p> <p>・今後の学びに向かう力として、「SDGs」の視点と関係付けて自分の考えを伝え合う。</p> <p style="text-align: center;">B⑫「獲得情報の再構成」／S-1「自然な結果」</p> <p>8</p> <p>・改めて、校歌の歌詞にはどのような思いが込められているか、言葉や報告書、共有したメモをもとに考える。</p> <p>・本単元で学んだことをまとめた上で、身に付いた力について考察する。</p> <p>・自分の考えを200字作文に記述する。</p>	○	○	<p>◎ 学習班での対話、全体での共有を通して、自分が言葉とどのような見方・考え方で関わることができたかについて整理することができる。</p> <p>◎ 最適解の一覧を整理したものを手引きとして提示し自分の考えと比較したり、関係付けたりすることができるようにする。</p> <p style="text-align: center;">【ワークシート】</p> <p>◎ 単元を通しての学びを振り返り、身に付けた力は何かを言語化することができる。</p> <p>◎ 学級全体で共有したことを可視化し、振り返り作文の記述の情報として整理できるようにする。</p> <p style="text-align: center;">【ワークシート】</p>

(7) 本研究と学習指導要領の関連について

本単元の「学び」を、解説に示された内容と関連付けるとどのように捉えることができるかについて、以下に示す表2に分類・整理した。

校歌の歌詞に示された言葉やそこに込められた意味、思いなどを深く理解するために、「梅」に関連する資料を学習者に提示し、学習者自身が歌詞に示された言葉と関連する情報を抽出し、得た情報と自己の考えとを関係付けることができるようにした。また、多様な他者との交流を通して、対話の中から必要な情報を抽出し、意味付けをする過程を設定した。これらの手立てにより、学習者が校歌の歌詞に示された言葉と、資料から抽出した情報、さらには多様な他者との交流を通して抽出し意味付けた情報とを比較しながら、自己の考えを形成していけるようにした。これは解説に示された中学校第1学年の「知識及び技能」の(1)「情報の扱い方に関する事項」のイ「比較や分

類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方についての理解を深め、それらを使うこと」に関連する。以上のような捉え方から、手立てを設定した。

国語科の内容	事項	単元観	指導観	目標①	目標②	目標③	
(中) 第1学年 知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項 (1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する	ウ 事象や行為、心情を表す語句の量を増すとともに、語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意して語や文章の中で使うことを通して、語感を磨き、語彙を豊かにすること。	温故としての校歌 知新としての校歌	校歌の歌詞に込められた想い	多様な言葉		
	(2) 情報の扱い方に関する事項 (2) 語や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。	イ 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うこと。	社会に開かれた教育課程、地域との連携・協働	情報の中から必要な言葉を分類・整理 歌詞に示された言葉と、自分の考えとを関連付ける	言葉と言葉の関連付け	見方考え方	関連する語彙の抽出
	(3) 我が国の言語文化に関する事項 (3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。	ア 音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと。 イ 古典には様々な種類の作品があることを知ること。	温故としての校歌 SDG s 地域に生きる自己アイデンティティ				語彙の由来 多様な資料
(中) 第1学年 思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと	(1) 話すこと・聞くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。	ア 目的や場面に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を整理し、伝え合う内容を検討すること。 エ 必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめること。	未来を見据える 附属中スクールボランティア制度	梅の実のような人材	社会への参画貢献しようとする態度	身につけた力	歌詞との関連
	(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。	ア 紹介や報告など伝えたいことを話したり、それらを聞いて質問したり意見などを述べたりする活動。	グローバル社会を見通す力	対話を深める	自分の考えを持つ	説明する	他者との対話や共有

表2 本単元と学習指導要領との関連表

(8) 授業者の三つの手立てについて

①「問い」を喚起する学習課題の提示

学習者は「梅」に関連する身近な具体物（お菓子、お土産品、お線香など）から、「水戸」に住む私たちと「梅」とを関係付け、なぜ「梅」なのかという問いを喚起していった。学習者に身近に存在する具体物から、次第に本校の校歌に示される「梅」に対する「問い」を立てていった。

そして、図2のように校歌の歌詞を提示した。学習者は図3に示すように、なぜ、「梅」なのか、という問いを根底に置きつつ、校歌の歌詞から生まれる「問い」を個人で立てた。

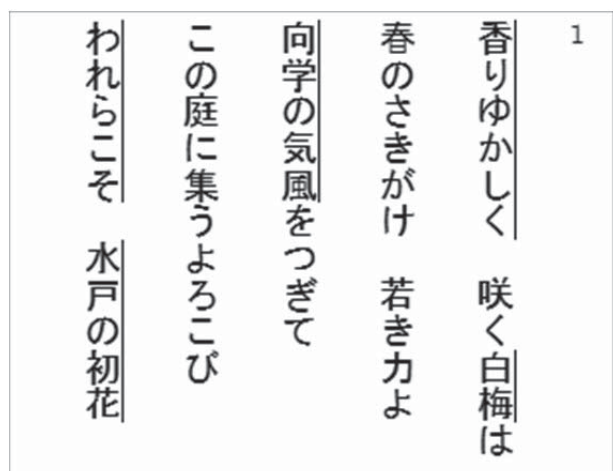


図2 考察した本校校歌の歌詞



図3 歌詞から「問い」を立てる学習者

② 「問い」を精選するために分類・整理する力を身に付ける手順の提示

さらに、個人で立てた問いを比較したり、関係付けたりしながら「価値ある問い」を分類・整理し、精選した(図4)。分類・整理、精選により五つに絞られた「問い」を解決する際には、学習者が自ら課題を選択し、課題解決のためのチームを形成した(図5)。



図4 問いを分類・整理し、精選する学習者



図5 解決する「問い」を選択する学習者

精選した「問い」は、表3に示すように「視点」、「問いレベル」、「手立て」に再分類、整理し、手控えとして作成した。この手控えを各GTに送付し、それぞれの立場として答えられるもの、答えるのが難しいもの等の見通しをもっていただくこととした。

班	No	問い	視点分類	レベル	手立て
A	①	なぜ「水戸の初花」という表現にしたのか。	表現	B	表現に着目しているので、問いは広がるが、質問の段階が必要であることを助言。
A	②	「われらこそ」とあるが、それは誰のことを指しているのか。	誰	B	OB・OGやSVなど学校関係者に主に質問すべき内容であることを指示する。
A	③	この校歌は副助詞(こそ)や終助詞(よ)が用いられている。これらはその前の言葉を強調するものである。そのことから、この効果で伝えたいこと(協調)はどこか。	どこ	A	「こそ」「よ」の言葉の意味を調べ、そこから「どこか」を共有したり議論したりする対話が見える問いであることを賞賛する。
A	④	「われらこそ 水戸の初花」に込められた思いと言葉の意味とは何か。	意味	C	質問の幅が広い。意味付けが難しく、対話が停滞する可能性があることを助言する。質問の段階や手順を示す。

表3 精選された「問い」の手控え(一部抜粋)

③ 「問い」の最適解を追究するための多様な他者との対話

本単元で学習者がインタビューを行うのは、「言葉に関する専門家としての大学教員、歌詞に表出する『水戸の初花』に関連する専門家としての水戸弘道館研究員、学習者と校歌を通して関わりをもつOB、OG、学習者と地域的関わりをもつボランティア活動者」である。これらのGTに学習者がインタビューをしながら、それぞれの立場から「言葉による見方・考え方」を働かせ、意味の形成としての最適解を追究する。

なぜ、多様な他者との対話が、課題解決につながるのか。それは、それぞれの立場からの視点により、対象に対する見方・考え方が違うからである。その差異がなぜ起こるのか、その差異を乗り越え、視点を共有するためにどのような手順が必要か、これらの点を授業者が提示することにより、言葉を「改めて見つめ直す」視点、つまり言葉を「改めて問う」という見方・考え方を育成することができ

ると考えた。授業者が学習者に対して「言葉による見方・考え方」を働かせる一つの手立てとして、このような多様な他者との交流の場を設定した（図6，7）。



図6 弘道館の研究者へのインタビュー



図7 大学教員へのインタビュー



図8 再インタビューに向けた作戦会議



図9 GTによるフィードバック

学習者は、それぞれの立場のGTに対し、事前に「問い」を解決するための「小さな問い（質問）」を準備した。その「小さな問い」は、誰に、どのような内容を問うか、という相手意識、回答の想定を踏まえたものである。一方、GTは事前に送付した「問いの手控え」をもとに、学習者の質問を想定していただいていた。両者がそれぞれ想定をもちつつ、「問い」に対する考えを伝え合うことで、おのずと「歌詞」に示された言葉を共有し、その意味への解釈を深めていった。学習者は、前単元の学習で身に付けた「傾聴三動作（あいづち・うなづき・賞賛）」をスキルとして活用しながら、GTから言葉を引き出す様子が伺えた。さらに、インタビューの回答を受けて、「肯定的な質問」のスキルや「信頼性の確保」をするスキルを用いながら（茨城大学教育学部附属中学校研究紀要 第46集 安実践「知識・技能一覧表参照」）学習者は丁寧に対応した。授業後のGTからのフィードバックでは、「皆さんの質問の仕方がよかったから、いい対話ができた」「中学1年生がここまでできるということに驚いた。」「自分自身の言葉との向き合い方を考えるきっかけになった。」などの評価を受けた。

5 研究の考察

(1) 学習者の変容

本研究を通して、学習者にどのような変容が見られたのかを、学習者の振り返り記述、及び語彙表出 (SPSS Text analytics for surveys) により分析した。

① 学習者の振り返り記述から

ア 授業を通して、どのようなことが分かったか。

- ・「白梅」や「水戸の初花」は、附属中生の生徒像を表していることを漢文の資料から読み取ることができた。
- ・専門家の方の話を聞いているうちに、対話がかみ合って、「白梅」と「向学の気風」との関わりや、「香ゆかしく」という言葉と梅がつながっていることまで話が広がっていった。
- ・「経験が大切だ」ということです。インタビューの時にこの言葉を聞いて心に残りました。

イ 授業を通して、身に付いたことはどのようなことか。

- ・「聞く」というものを身に付けることができました。相手の言った「表面から読み取れる意味」ではなく「表面」のさらに奥の、相手の考えていることを読んで、表面と奥を併せ、そこから自分たちの考えを導き出すというものです。
- ・前に学んだ「傾聴三動作」「ふさわしい言葉遣い」などを生かした。すばやくメモをとったり、事前に質問内容を検討したりすることもできた。

上記に示すような振り返り記述から、初めてお会いする地域人材（主にボランティア活動者）との交流を行う中でも、傾聴のスキル、信頼性確保のスキルを活用して対話し、意見や考えの広がりを実感した学習者の姿が伺える。学習者は、校歌の「歌詞」に込められた思いを理解したことを示しているのではなく、その過程で多様な他者とどのようなスキルを用いて交流し、どのような思考で最適解を得ることができたのかをメタ認知しているということになる。このことによって、「言葉による見方・考え方」を働かせ、学習課題を解決する過程で「話す・聞く」の知識及び技能を身に付け、高め、思考力や判断力、表現力を育むことできたということが考えられる。

② 振り返り記述に表出した語彙の分析から

本研究において、単元に先立ち、以下の設問について学習者に記述させた。

【設問】あなたは、本校の校歌に示された歌詞について、どのような思いが込められていると考えますか。言葉に着目し、自分の考えを記述しなさい。

本設問の意図は、学習者によって自然に記述されたテキストから、学習者にどのような考えや意味が形成されているのかを、表出した語彙に着目して分析することである。なお、学習者の変容を捉えるために、学習者に同じ設問で学習後にも記述させた。

（学習前：令和元年6月 抽出学級 33名 学習後：令和元年9月 抽出学級 33名）

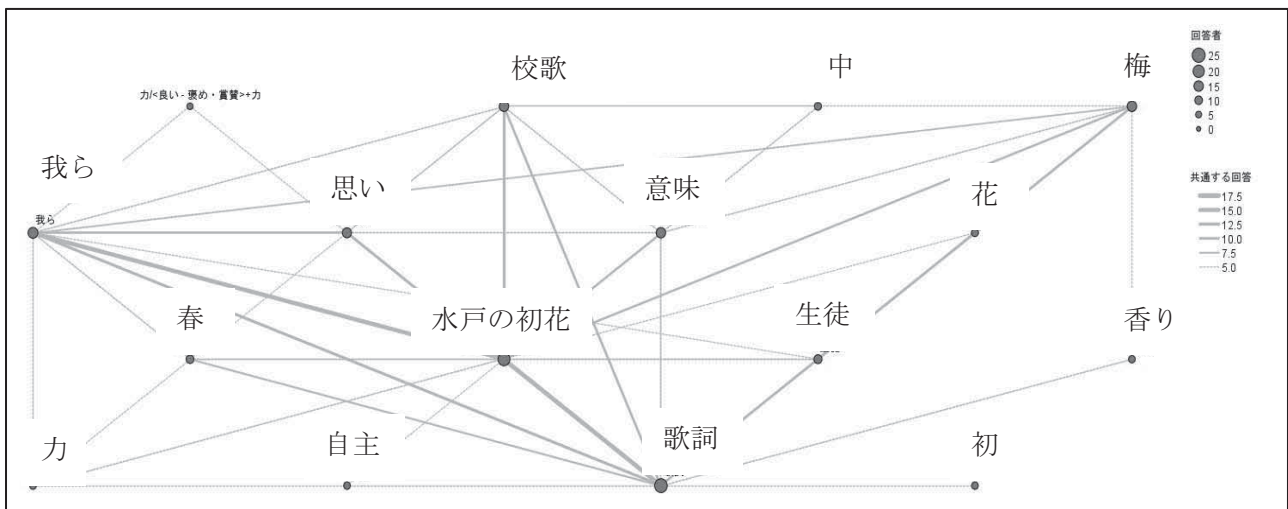


図10 学習前の記述分析

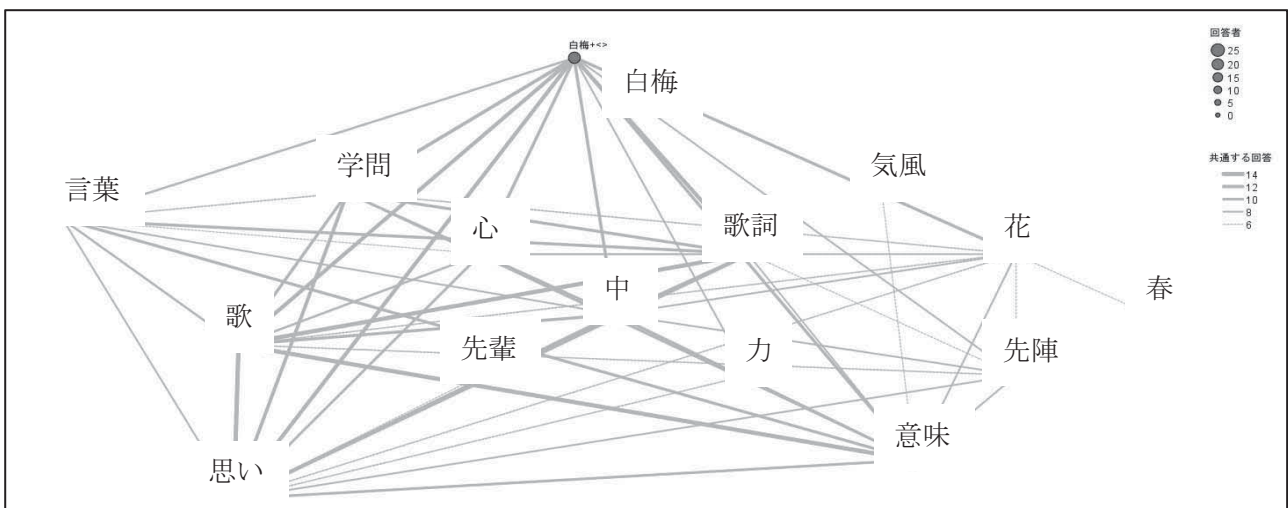


図11 学習後の記述分析

図 10 に示すように、学習前に表出した言葉は、「校歌」「梅」「力」「花」「香り」など、校歌全体を俯瞰的に捉え、そこに示される言葉を客観的に眺める学習者の姿が推察される。その中でも「水戸の初花」という言葉に、学習者を含め収斂される関係性を捉える姿も伺える。しかしながら、その関係性を構造的に深く捉えているというよりは、関係性は捉えているが、その関係性がどのようなものであるか、というところまでを捉えているわけではないことが分かる。そのために、表出した言葉はそれぞれ点在的であり、言葉と言葉の距離は一定の間隔で表出している。このことから、校歌に示される言葉について、外在的な言葉として校歌の歌詞を捉えていることが分かった。

一方、学習者の変容について、図 11 に示すように、学習前と学習後に表出した言葉から、まず捉えられることは、言葉と言葉の関係性がより構造的に、ネットワークとしてつながっているということである。学習後には、「生徒」や「私」という語彙は表出していない。ということはつまり「私」である学習者自身にこれらの言葉が内在化しされたと捉えてよいのではないだろうか。内在化されたこれらの言葉を、共起を含め「自分のもの」とした姿が伺える。その関係性は、「歌詞」と「学問」と「心」、「力」などが中心的に内在化されている。興味深いのは、「白梅」、「言葉」、「思い」、「意味」などが、それらの言葉を内包する構造である。つまり、「白梅」と例えられる学習者は、歌詞に示された「言葉」に込められた「思い」があり、その意味を深く考察する中で、そこに内在化された様々な言葉が関係付けられて意味をもつことを捉えていると推察される。

以上のように、学習者は、学習前には自分に外在していた歌詞の言葉を、本校生徒としてあるべき姿としてそれらの言葉を内在化したと考える。このことから、本単元学習を通して、学習者は外在している校歌の歌詞について、自ら「問い」を立て、「問い」を吟味し、課題解決に向けて行う多様な他者との交流から自己と言葉を関係付け、そこに示された言葉に内包された思いについて自己の最適解を発見し、自己の考えや意味を形成することができたと考える。

6 省察及び今後の見通し

本研究では、本校の先行研究における「知識・技能一覧表」との関連において、これまでの単元の学習が生きるよう、単元の配列を工夫した。また解説の中学校第1学年「知識及び技能」の(1)「情報の扱い方に関する事項のイ「比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方についての理解を深め、それらを使うこと」に関連すると考えた。

さらに、思考力・判断力・表現力においては、主に「A話すこと・聞くこと」における指導事項を関連付けて単元を構想した。このように、解説に示される指導事項や指導内容をもとに、地域に生きる多様な他者と交流することを通して、目的意識や課題意識、多様な他者への相手意識がおのずと高まる姿が捉えられた。また、「問い」を立てる資質・能力を育成する上で、最も必要であったのも、多様な他者への相手意識であったと考える。

学習者は主に、同世代の学習者と学びを形成している。交流を学習者同士に限定してしまうと、学習の過程も共有しているため、1年間のカリキュラムを考えると、目的意識や相手意識が停滞しがちになってしまうという課題があると考えた。そこで「多様な他者との交流」が目的意識や相手意識の高揚に効果的であるとともに、「多様な他者との交流」をコーディネートする授業者のマネジメント力が今後ますます必要になっていくと考える。

今後は、1年間を見通した学習材の開発と多様な他者との交流を組みあわせて合わせて単元を構想する「資質・能力ベースの年間計画」を作成するとともに、育成すべき資質・能力を効果的、系統的に育むカリキュラム・デザインを国語科として構想し、具体化することが必要であると考え。教員は、すべての単元で資質・能力を育成することに強みを有しているわけではない。時には、地域人材や多様な他者との交流が学習者の資質・能力を育む場合もあるだろう。授業者は、年間を見通して単元を配列し、その中に目的意識や相手意識としての「多様な他者との交流」を設定していかなければならないと考える。これらのマネジメントは、地域と連携・協働し、地域に生きる人々と学校がともに地域コミュニティを構築することにもつながる。さらに、地域の人材やボランティア活動者、OB・OG とともに課題を解決する学びをデザインしていくことにより、育成すべき資質・能力が共有され、学習者がこれからの社会をたくましく生きるための資質・能力を育成するための方針が共通理解されていくのではないだろうか。そのような思いをもちつつ、今後も研究を進めていきたいと考えている。

〈引用，参考文献〉

安居總子（2013）「今、『国語』を問う－教師のプロフェッショナルリズム－」東洋館出版，26-35.

加藤崇英他（2018）「教育の制度と学校のマネジメント」時事通信社，94-103.

佐藤晴雄（2002）「学校を変える地域が変わる 相互参画による学校・家庭・地域連携の進め方」教育出版，63-68.

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編」

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編」